

キャンタベリ巡禮の世界

中山, 竹二郎

<https://doi.org/10.15017/2556571>

出版情報 : 文學研究. 30, pp.1-14, 1941-12-25. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :

文學研究

第三十輯

(昭和十六年十二月發行)

キヤンタベリ巡禮の世界

中山竹二郎

まへがき——『キヤンタベリ・テイルズ』に關する一考察として、物語とその語り手との關係を概観する。
文字通り概観であつて、個々の語り手について詳述することを差控へる。猶印刷に對する考慮から本文にはロ
ーマ字を餘り多く用ひないことにし、必要の場合には註釋の中に之を示すに止める。

チウサアの詩人的活動の跡をたどつてみるに、『¹⁾薔薇物語』から始まつて『²⁾善女傳説』にいたる諸々の作品はいづれも皆大陸文學の強い感化の下で書かれた。その手法ばかりでなく、題材も多くは外國から輸入されたもので、従つて翻譯とか翻譯といつた要素が彼の作品中には甚だ多い。その當時の³⁾あるフランス詩人はチウサアを「偉大なる

翻譯家」として稱へてゐる。彼の『トロイルスとクリセイデ』の一篇はまことに傑作であり、その心理研究の精密さや性格描寫の確實さに於て近代イギリス小説の先驅たる榮譽を擔つてゐるに違ひないが、歐洲文壇からみればそれはイタリア文學のイギリス版に過ぎないし、その題材も歐洲文學共通の源泉たる古代ギリシヤに求めてゐる。

まことにチウサアは島王國に住みつゝ、絶えず海峡の彼方に靈感の泉を求めること年久しかつた。恐らく少年の時代から詩筆を執つた彼は、その齡が五十を過ぎ漸くその文學が圓熟の境に入る頃までこの傾向を示し續けた。これまでのチウサアの詩什をみてゐたものは、遂にチウサアは大陸文學の信奉者としてその輸入者としてその翻譯者として終るであらうと豫想したかも知れぬ。しかるにこの頃になつてわが詩人の心境に一の異變が起つた。異國にのみ向けられてゐた眼を自國の方に轉じ、近く身の邊りに題材をとり、獨創的な手法により獨創的な構造を有つ新しい型の文學を創作しようとする意圖を胸に懷くに至つた。この新しい文學に於ては大陸文學の傳統たる幻夢の世界は追放され、異國とか古代とかのロマンス構成の材料はただそれ自體に於ては重要な意義を失つた。これに代つて現在の時とイギリスの社會が美醜さまざまの姿を映じてゐる人生記録が制作された。外國文學の心酔者としてチウサアを目してゐたであらう人々にとつて、まことにこの方向轉換は一の驚きでなければならぬ。もつともこれは突發の變異ではない。從來と雖も甘美なロマンスの世界にとかく安住できないで、幻夢の霧の中に折々は現實の形を顯示するこの詩人の傾向には著しいものがあつたが、それは部分的な現はれに過ぎなかつた。元來文學上のイヅムはそれを奉ずる作家の特質的活動を阻止する弊を屢々傳ふ。チウサアは外國文學のコンヴェンションを遵奉するの餘り、永きに亘る詩人生活に於て、自分のものを抑へ抑へて來た。自然な詩想の動きも傳統文學の定型に流し、現實の人生も擬人

法や幻夢詩の鑄型に溶かして現はすことを詩の正道と解してゐたとさへ考へられる。さうした「正道」から離脱することが即ち眞の自己を發見することであつた。かくしてイギリス詩壇は大陸の先進諸國の有たなかつた傑れた文學作品を有つに至つた。この作品こそ『キャンタベリ・テイルズ』である。これはさまざまの人達によつて語られたさまざまな説話の集である。説話そのものはフランス、ラテン、イタリア文學からの借用譚案が多いが、語り手はいづれもイギリス人であり、イギリスの色調が全篇を通じて強い。作者チョウサアの性格が微妙複雑を極めてゐる如く、彼の代表作たるこの物語集も他のイギリス文學の中にその比を見ないほど複雑多彩な内容を有つ。

『キャンタベリ・テイルズ』は二重の性格を具へてゐる。その一は物語集であること、その二は物語の語り手たる一群の巡禮衆の道中日記であることである。この二つの性格が反應しあつて特異な深みをこの作品に與へてゐる。まづ物語集としての『キャンタベリ・テイルズ』の構成について。

中世文學には幾つかの短話を輯録して一篇の物語集に收める企が早くより行はれた。そしてその編纂も無雜作な寄せ集めではなく、これを組織化し統一するための枠組が案出された。ボカアチオの『デカメロン』の序話などはその適例である。如何なる事情のもとに、如何なる動機よりして、次の物語が語られたかを披露し説明するための一小話がまづ巻頭に置かれる。恐らく中世人の實際生活の中には斯うした物語を語りあふつどひが屢々行はれ、それが説話文學の一の型を生んだのではあるまいか。ともあれチョウサアが『キャンタベリ・テイルズ』の構造を着想したとき、一の序話によつて導かれる物語の集成といふ意味に於ては、中世文學上なんらの新機軸を出したのではない。既に彼みづから『善女傳説』などの舊作に於て短話集を企てた。

因にこの『善女傳説』なる説話集はチヨウサアの作品の中で佳作ではあるが作者自身の野望的な意圖を満足せしめなかつた、ある意味では失敗の作品であつた。失敗の因をなすものはその題材の選び方にある。戀愛に殉じた貞節純情な古今の婦女の逸話傳説を集大成する構想の下に着手されたこの作品は、それが餘りにも限定された題材を餘りにも一方的な人生觀に基いて取扱はねばならぬ窮屈さに詩人を倦怠せしめた。チヨウサアの詩心はさうした單調さに耐へられなかつたのであらう。この經驗は彼が次に計畫した物語集の題材をきはめて廣い範圍に求めしめ、その内容をきはめて複雑多様ならしめる努力へと導いたのであらう。それは努力といふより寧ろ自然な傾向であつた。闊達なチヨウサアの文學精神が眞に自己に適する手法と題材を獲得したとき、それは人生の美醜の諸相を表現し千姿萬態を含んだ作品として現出すべき筈である。『善女傳説』に於ては餘りにも窮屈な拘束を自らの上に課しその題材を自ら制限して苦杯を嘗めたチヨウサアは、新しく着想した第二の物語集に於ては最大限度の自由を自らに與へる方法を取つた。それは自己抹消——少くとも自己縮小或は自己變貌による方法である。『善女傳説』はチヨウサア自らが物語る態で書かれてあるが、この形式は宮廷詩人としての彼の地位がさまざまの心配りを詩作の上に要求するに違ひない。故に彼は次に企圖した物語集においては、多くの人々を拉し來つてその好むままに語らしめ、自分は單にその筆録者たるに過ぎないといふ態度を取つた。そして物語の進行につれ、かく韜晦した詩人が見出されて、自ら語り手とならざるを得ない環境に置かれたとき、彼は自己を無趣味にして魯鈍な一介の男として表現しようとする方法を選んだ。かうした自己變貌は既にチヨウサアは幾度か舊作(9)に於て試みて成功してゐるのである。

さて多くの語り手を何處に求めるべきであるか。

『キャンタペリ・テイルズ』が物語集としてユニークな成功を収め得た要因の一は、語り手として巡禮の一團を拉し來つたことにある。そして彼等が社會的にも教養の上でも多種多様であつた如く、物語そのものが高度の複雑性を帯びて來た。イギリス國民の縮圖と云つてもよい程に、社會の各層職業の各種別を網羅するやうに選ばれた聖寺參拜者の一群こそ、チョウサアのいみじき着想と云ふべきであらう。この事は『デカメロン』と比較してみると更に明となる。『デカメロン』に於ける語り手はフロウレンスの上流の男女青年であり、階級的差別を缺き、みな一樣に優雅な用語を以て語り、そこに個性の差がない。『キャンタペリ・テイルズ』に於ては語り手の職業趣味教養の異なるにつれ、個々の物語はそれぞれ騎士的な典雅さや、職人風の猥雑さ、僧侶的な末香臭味があり、同じく僧籍に屬しながら尼寺の住持の物語と、修道僧のそれとは題材や精神に於て格段の差がある。

かく寺詣でに物語集成の契機を見出したのは果してチョウサアの創意であらうか。彼と同時代のさる凡庸なイタリア作家の物語集にやゝ之と相似た趣向が見られると云ふ。果してチョウサアがこの作品の影響を受けたか否かは断定する限りではない。元來イタリア文學ではグンテ、ペトラルカ、ボカアチオなど錚々たる一流作家に私淑してゐたチョウサアは恐らくこの一流作家を問題にしなかつたのではあるまいか。ともあれ、彼は文學の先例から暗示されるまでもなく、彼の身近かに寺詣でのさまを觀ることを得た。彼は一三八五年の春からこの方、グリニッジに居を構へた。ここはロンドンからキャンタペリへの巡禮の途中にあつたから、善男善女が聖寺へ集ひ詣ふでる行くさ歸るさの風景を常に目撃したであらうし、さらに又、彼自ら斯る善男善女の群に加はつて、この行事を内部から具さに觀察したであらうと想像することもあながち無謀のわざではない。チョウサアはその長い公生涯を通じて王侯貴族と深い關

係を有ちながら、一般民衆の生活から隔絶されることのなかつたのは、元來彼が市民階級の出であるゆえばかりでなく、包容性の豊かな彼の性格にも因るのであらう。キャンタベリ巡禮衆に雜る詩人チョウサアの姿を想像するに、それは彼の自畫像に見るやうなはにかみ、勝ちな學究の憂鬱な姿ではなく、武家若侍から商賈職人まで誰彼の別なく打寛けた會話を交はす世慣れた通人のそれであつたらう。

チョウサアがその説話集の語り手として巡禮の集團を選んだことが如何に適切であつたかは、彼の舊作『善女傳説』の効果と比較すれば自ら明かである。後者に於ては戀愛に忠實なりし婦女をそれぞれ主人公とする短篇物語の幾つかを詩人みづから物語る體に作りなされ、その取材その構造まことに千篇一律の印象を與へ、その單調さにまづチョウサア自身耐へ得ず、未完結に終つてゐる。この不成功の苦澁は恐らく次の物語集の構想に際し、材料を如何に多彩ならしめ、構造を如何に複雑ならしめるかに關し、詩人をして深く反省せしめたであらう。『善女傳説』に於て詩人が題材選擇の自由を放棄し「戀愛道の殉教者達」にその範圍を局限した愚拙さに自ら復讐するかの如くに、次作に於ては全く總の拘束から開放された立場に自己を置くことに意を用ひた。聖俗の別なく雅麗猥雜を問はず、凡百の材料を取り來つて之をその職業から見てその性格趣味から考へて最も柄に嵌まつたと思はれる語り手の口から語り出さしめる構造を取つたのである。そして語り手はそれぞれ己の好む説話を己の好む語りぶりを以て物語る自由を與へられる。法話もあり、幻談もあり、武勇談もあり、戯話もあり、懺悔話もあり、時には禮節を辨へぬ下司な口から尾籠猥醜な情話も漏れるやもはかり知れぬが、詩人は之を抑制しようとしめない。若しこれら説話の内容や語り方に對する統制力があるとしたらそれは語り手達、すなはちキャンタベリ巡禮衆の集團の中に存する、詩人は全く與り知らぬ、といふ

態度を取つてゐる。現にチヨウサアみづから語り出した物語はその中途に於て散々に嘲笑揶揄されたため他の説話に轉じなければならなかつたほど、彼は自らを單なる集團の一員に過ぎない地位に置き、その集團の記録係として克明に忠實に語られた説話を讀者に傳へる任務のみを自らに課したのである。そしてこのポーズこそはチヨウサアの社會人としてのデリカシイと詩人としての藝術的慾求を調和せしめる巧な考案であつた。

ともあれ、かうした考案によつて多様な語り手に多様な物語を割りあて得べき構造をわが詩人は獲得したのである。しからば之に次いでこの多様な材料を如何にして集輯すべきかの問題に直面する筈であるが、チヨウサアの場合、この順序は逆に考へて、多様な材料は既に有してゐるので、これに適はしい語手を得ることが第二に置かれた問題であつたらうと考へられる。

元來チヨウサアは多く外國の書を讀んだ。そして讀んだものは多く彼の詩囊を肥した。讀書と詩作の半生を通じて彼は幾多の短篇物語を譯し、これを筐底に藏してゐたと考へられる。その中には獨立の作品としては小規模に過ぎるものもあつたらうし、或は猥雜にしてあからさまに自作として發表し難い小話もあつたらう（——彼は宮廷詩人であつた）。かうした捨て難い短篇小話も他の本格的なロマンスなどと共に纏めて一の集とするならば、小話と雖もその所得て光を放ち多彩な物語集に大きな貢獻をするであらう。そして物語集は如何に千姿萬態の内容を盛り人間生活の種々相を表現し得ることであらう。そこには婦女の龜鑑グリジルデイスの美談もあるし、好色な年増女の閨房情話もあるし、聖セシリアの生涯を取扱つた敬虔な法話もあるし、メリベエの妻ブルウデンスの高徳を語る散文の道話もあるし、初期キリスト教徒の受難を表象するコンスタンス姫流浪物語をフランス語散文から翻譯韻文化した中篇ものもある

るし、雄鶏と狐が活躍する禽獸戯話もあるし、當時の世人から擯斥されてゐた托鉢僧や免罪僧の樂屋話もあるし、少年殉教者の可憐にして悲壯なる傳説もあるし、東洋渡來の韃靼王キャンピスカンと靈馬の幻想的なロマンスもある。かうした潤澤な素材の外に、既に世に出したパラモンとアサイトとの鞘當でのロマンスは筆を加へて集の中に編入することも可能であるし、また練金術士の詐巧を材料として短話を一二篇創作し得るだけの經驗も持ち合はせてゐるから物語のストックは十分の筈である。事實チウサアがこの物語集の「序詞」に於て讀者に豫告した計畫によれば百數十篇を下らない物語が準備されてあつた。何たる老大多彩なコレクションであらう。恰も狩野派四條派の大作の間に鳥獸戲畫が混り浮世繪が加はり南宗の小品が之に伍し更に西域から渡來の宗教畫をも並べたやうな一大展觀である。そして畫廓のあるじは微笑を湛えながら、人麿芳年の俗調を厭ひ給ふ方は宜しく元信應擧の典雅を鑑賞し給へと告げるだけの餘裕を示してゐる。

『キャンタベリ・テイルズ』は多彩な物語を收めた中世文學の一大寶庫である。しかし物語のみを讀んでその語り手たる巡禮衆を見通してはこのテイルズの全面を知り得たとは云へない。立體彫刻の眞の良さを味ふにはその背面や側面からの鑑賞が必要であるやうに、この物語集の醍醐味を深く知るためには、説話それだけでなく、それぞれの説話を統一結合してゐる要素——即ち物語全體に對する序詞と、説話と説話との間のつなぎとを無視するわけにゆかない。これらの部分は時に框構造と呼ばれ、この框の中にそれぞれの説話が嵌めこまれてゐるさまは、恰も混ぜ張り屏風の框と地のやうである。そこに張られた扇面、短冊、色紙はとりどりに美しいが、われわれは屏風の紙やそのふちの塗りの良さを見落してはならない。この框構造は謂はば寺詣での紀行記、または巡禮衆の行狀記とも見るべき部分であ

り、それぞれの説話と同様に作者の深い感興がこの部分に注がれてゐる。少くともわれわれ近代の讀者にとりては、或る説話には殆ど興味を感じ得ない場合があつても、巡禮の言葉や行ひには常に抑へ難い魅力を感じないことはない。寺詣での善男善女を登場人物と見做して、「キヤンタベリ・テイルズ」を一篇の人生喜劇と考へると、物語はそれぞれの登場人物の科白——相當に長い獨白や對話に相當して、各々の性格を直接間接に鮮明にする。そしてつゞきは單純な書きではなく、近代劇の作家、例へば Shaw や Barrie に於けるやうに登場人物の内部描寫や事件報告などを含んでゐる。（此點に於てこれら近代劇作家の作品は劇と小説とを兼ねたものと考へられ、と書きの重要性が増大する。）そして物語全體の「序詞」は單に語り手を讀者に紹介する作者の口上ではなくして巡禮喜劇の第一幕を構成する。しかもこの第一幕は一篇の劇の中でどの場面よりも重要性を有ち、そこに表現された登場人物のそれぞれの性格は一見いかにも平板的に、類型的に、靜的に取扱はれてゐるが、この喜劇の進行するにつれて立體的に、個性的に、動的に展開する契機をその内に含んでゐる。例へば「序詞」に於ては壁面に陳べ掲げられたる肖像畫群がやがては躍動を始めそれぞれ特異な歩み振り踊り方を示す活人形と現じて來るのである。この驚異すべき肖像畫の一群を個別的に考察鑑賞することは暫く措き、茲にはその肖像畫はあらゆる階級、あらゆる性格を有つ人物の表現であり、云はば當時のイギリス社會の縮圖であることを想起するにとどめよう。

日常生活に於ては相逢ふ機會を與へられない各階級各職業の代表者が集ひ寄つて一の集團を構成するに至る契機は實に寺詣でといふ行事にある。ロンドンにはサザックのとある旅宿に集り、そこよりキヤンタベリの寺院に達するケント州の街道がこの喜劇の舞臺となる。その舞臺に活躍する人物としては武士階級からは騎士、若侍、衛士が選ばれ、智

識階級の代表には辯護士、醫師、大學生、詩人（チウサア自身）が加はり、宗教界からは修道僧、尼寺の住待とその下役の牧師、托鉢僧、免罪僧、村の牧師などが出で、職人階級は帽子職、大工、織匠、染物工、家具職が所屬組合の定まりの服装をして代表してゐるし、その外に商人、船頭、粉屋、料理人、農夫などあり、また巡禮の途中から練金術士の徒弟と名乗る男が馳せ参じたり、一行の東道役を勤める宿屋の亭主がゐる。數多くの男子に伍して女性として尼寺の住持とベアス町の内儀が一行を賑はしてゐる。實際王侯貴族を除いて殆どあらゆる層の國民がその代表者を一人づつこの集團に送つてゐるのである。しかもその代表者はその屬する階級の最上最良の人物であり、それぞれの職業人の典型として恥づかしからぬ粒選りである。船頭は航海の術にかけては天下無双の舟乗りであり、料理人は板場としてはピカイであり、騎士は歐羅巴に名だたる古武士である。斯うした選良かうした選り抜きの代表者はそれぞれの職業に由來する偏見習癖を具現してゐる。醫師は聖書の知識に乏しく黄金を愛する醫者氣質を有ち、托鉢僧は善男善女を騙いて淨財を擗取る惡習に深く染まつてをり、學者は學者氣質、農夫は百姓氣質に徹してゐる。此點に於て巡禮衆は類型たるを免れない。同一層同一職業に共通な性癖の抽象と考えられる。

類型は具體性を缺き、空疎な、眞實性に乏しい存在と墮し易い。しかるにチウサアの藝術の驚異はこれら類型が類型でありながら同時に最も鮮かな個性を具へてゐることである。類型と個性とが一個の人間の中に重なり合つてゐる。粉屋は粉搗業者に特有な不正直さで睨目をこまかし搗賃を食ふ一般的な粉屋であると同時に、鼻のてつぺんに疵一つあつてその上には牝豚の耳の剛毛のやうな赤い毛が生へてをり、大きな爐に似た口からはいつも猥らな戲言が飛出し、力の強い喧嘩好きの男である。われわれは『キャンタベリ・テイルズ』の「序詞」を過ぎて「粉屋の物語」と

「執事の物語」を了へる頃にはこの男の粗野な因業な性格が強く印象づけられて長く忘れることのできないものとなると同時に、中世イギリスの粉搗業者一般の生活を瞥見し得たやうに感じる。遠望と近景とが一枚の畫面に浮き出して來るのである。

かやうに相異なる性格を有ち相異なる社會層に屬する三十人の男女は一つの動機に因つて、平素彼等相互の間に繞らされた墻壁を越えて一所に集まり一の團體を構成する。その一つの共通の動機とは即ち聖寺參拜といふ敬虔な動機である。殉教の聖者トマス・ア・ベケット (Thomas a Becket)こそ彼等が人生のさまざまの憂苦に際して或は病痼の回復を祈り、或は旅中の恙なきを祈願し、その加護を蒙つた有り難き尊者である。花咲き鳥囀る陽春の日を選んで、彼等はこの聖者の眠るキャンタベリの寺院に祈願成就の御禮詣でをするのである。神明の前に於ては俗界の差別は消え去り、騎士も織匠も等しく一人の人間として同一の平面に置かれる。寺詣では社會層を水平化する。

また巡禮は一の行旅であり遊山でもある。ロンドンからキャンタベリまでの往還に費す旬日は日常生活の拘制から開放されて自由に暢達に楽しみ得る旬日である。彼等は春のうららかに酔ひ、酒を嗜むものは麥酒の杯を傾ける。同行の旅人は互に社會上の懸隔を忘れて共に語り打興する。一行中の粉屋はサザックの宿屋を發足するとき風笛を吹き鳴らしてお祭り氣分を高調させる。このしばしの旅を終へてロンドンへ歸り着いたとき彼等は常の環境に復歸せねばならないことを知つてゐる。さればこそ彼等はこの幾日かを心ゆくまで享樂しなければならぬ。まことにキャンタベリの寺詣では敬虔と歡樂との二重的性格を有つのである。

この巡禮の途上に道中の興趣を深めるために物語を互に語りあふ催しが行はれたのは蓋し自然である。既に日常生活

活から遊離してかりそめながら平等の立場に置かれた巡禮衆は憚ることなく取り繕ふことなく、それぞれの生地を出し、それぞれの性格や教養に應じて物語の材料を選ぶ自由を有つ。若侍は青年武士にふさはしい戀と冒險の傳奇譚を語り、謹直な大學生はベトラルカから學んだ烈女的美談を選び、感傷的な尼は少年殉教者の悲話に涙を絞らせ、料理人は放蕩に身を持崩した番頭の行狀記を話し、バアスの町の多情な内儀はその半生に持つた幾人かの夫の品評をし、豊かな生活の中に耽美的な趣味を有つ修道僧は「拙僧の庵に百ほども藏してゐる」悲劇の梗概を叙する。また巡禮途上の環境に因つて説話の題材が決定される場合も起る。粉屋の物語はさる大工職の女房がその同居人の學生と姦通するといふ筋であつたが、之を聽いてゐた大工上りの執事は粉屋が己を嘲笑したものと思ひ込み、さる村の粉屋に關する猥雑な物語を以て之に應酬したり、また召喚吏と托鉢僧との不和が嵩じ互に相手の職業の内幕を暴露する物語によつて泥仕合を演ずるなど、この小世界に於ける葛藤が物語の内容を決定する場合が屢々起つたのである。

この小世界の住人がそれぞれの道に於ける第一人者であることは既に述べたところであるが、とりわけ大きな存在として讀者の印象から永く消えぬ人物はかの宿屋の亭主である。チウサア藝術に於ける性格創造の極致として、シェイクスピアのフォルスタフと比肩し得る此男は「御殿の式部官にもふさはしいほど風彩の堂々たる大男で、その眼は輝き、無遠慮な口を利くが、賢明で快活で、ロンドンの商業街チイプサイドにこれほどの市民はゐない」と詩人が「序詞」の中でまづ記述してゐる、が彼の性格は漸次展開されて、その輪廓の太さ、その如才なさ、その諧謔の粗笨な逞ましさは巡禮の旅の進むにつれて鮮明に現はれて来る。彼は自ら巡禮一行の東道の役を買つて出て、この小世界の獨裁者として振舞ふことを許される。彼により語り手が指名され、語り物の内容が注文される。巡禮衆の間に紛争

の起つたとき之を調停するのも彼の役である。物語競演會の司會者である彼は傍若無人に語り手を擲擻し、罵倒するが、相手によつては急に聲を造りつつましげな口調で話しかける。また賢夫人に關する道話を聽くと、ロンドンに殘して來た己が女房のはしたなさが憶ひ出されて聴衆の前で泣言を云ふ。かやうにこの亭主は野放圖に自分をさらけ出して見せる。われわれは彼の脈搏を感じ體臭を感じ、實在人物以上の眞實性を有つ存在として彼の姿を見るのである。現存するチヨウサアの作品中には劇文學の範疇に入れるべきものは一篇もない。しかし形式に於てはともあれ、『キャンタベリ・テイルズ』の巡禮紀行は正に劇であり、そのプロタゴニストはこの宿屋の亭主である。

この劇に於てチヨウサアが彼自身に割りあてた役はまことに微々たる端役に過ぎなかつた。旅程第一日ある敬虔の物語が終ると、かの亭主は悪戯氣分からかれてチヨウサアに向つて、「君は誰だね？、まるで兎でも搜してゐるやうだ、いつも地面ばかり見詰めてゐなさるわい」と例の擲擻を投げかける。「愉快な話を一席」と亭主に促されるままに彼が語り出した武勇傳は内容の荒唐無稽さ、措辭の拙劣さのため亭主から制止されるのを合點ゆかず、チヨウサアは「何故ですわね」と反問する。亭主から拙惡な詩だと正面から罵倒されて結局散文の道話へ轉じ、辛うじて語り手としての責を果した。この自畫像に於けるチヨウサアは世事に疎い魯鈍な男として表現されてゐる。自明の事理に關して「何故ですわね」(“Why so?”)と怪訝さうに發する反問は彼の自畫像に屢々用ひる自己抑遜法の一つである。客觀詩人たる彼は自己を客觀化し縮小化して、描出せんとするキャンタベリ巡禮の世界を鮮明に細密に讀者に傳達しようとしたのである。

(註)

- 1) "The Romaunt of the Rose." 現存する作品中最初期のもの。
- 2) "The Legend of Good Women." 大凡 1385—95年の作。
- 3) Eustache Deschamps.
- 4) "Troilus and Criseyde." 1385—6年頃の作。
- 5) "The Canterbury Tales."
- 6) 例へば "The Book of the Duchesse" に於て歪められた自註條がある。
- 7) Giovanni Sercambi の "Novelle" は廣の道中で語られる態になつてゐる。(R. D. French: "A Chaucer Handbook," pp. 193—4)